３月２９日（日）マルコの福音書１４章１～９節

「彼女は、自分にできることをしたのです。埋葬に備えて、わたしのからだに、前もって香油を塗ってくれました。」（８節）

３節に「さて、イエスがベタニアで、ツァラアトに冒された人シモンの家におられたときのことである。」とあります。ツァラアトに冒された人シモンに関するいやしの記事はどこにもありませんが、おそらくこのシモンは、イエスによりツァラアトをいやしていただいたのだろうと思われます。シモンは、その感謝と交わりの意味をもってイエスと弟子たちを食事に招かれたのでしょう。すると、「ある女の人が、純粋で非常に高価なナルド油の入った小さな壺を持って来て、その壺を割り、イエスの頭に注ぎました。」その行為についてイエス様は、「埋葬に備えて、わたしのからだに、前もって香油を塗ってくれました。」と言われました。イエス様は、この女の人がしたことを理解してくださり、９節では「世界中どこでも、福音が宣べ伝えられるところでは、この人がしたことも、この人の記念として語られます。」と言われて称賛されました。イエス様は、「彼女は、自分にできることをしたのです。」と言われましたが、私たちは十字架におかかりなって私たちの救いを成し遂げてくださったイエス様のためにできることは何でしょうか。できることをすることで、イエス様への献身と感謝を現わしてまいりましょう。

しかし、この女の人がしたことについて何人かの者が憤慨して互いに「何のために、香油をこんなに無駄にしたのか。」（４節）と言いました。ここで憤慨すると訳されている言葉は、激しい怒りの感情を表しています。その理由として「この香油なら、三百デナリ以上に売れて、貧しい人たちに施しができたのに。」（５節）ということでした。欄外注を見ますと、「一デナリは当時の一日分の労賃に相当」とありますので、約一年分以上の労賃に価する香油ですから、相当に価値があったことは間違いありません。そして憤慨するだけでは飽き足らなかったのでしょうか。「彼女を厳しく責めた」（５節）ともあります。無駄かどうかという判断の基準は、自分がしたことや支払った金銭が自分にとってどれだけの利益や価値を生み出したかによってなされます。このイエス様のためなら全生涯を献げても無駄ではありませんし、全財産を献げても無駄ではないはずです。イエス様のために献げる時間や金銭、労力のすべてを私たちは最も価値あることのために用いていますし、イエス様に仕えることができるような人生へと導かれたことを、今日ともに心から感謝しましょう。

３月３０日（月）マルコの福音書１４章１０～２１節

「十二人の一人で、わたしと一緒に手を鉢に浸している者です」（２０節）

「過越の食事ができるように、私たちは、どこへ行って用意をしましょうか。」と尋ねる弟子たちにイエス様は、まるで見てきたかのような具体的な説明をし、１６節では「弟子たちが出かけて行って都に入ると、イエスが彼らに言われたとおりであった。」とあります。

そしてイエス様が十二人の弟子たちと食事をしているとき、「あなたがたのうちの一人で、わたしと一緒に食事をしている者が、わたしを裏切ります。」と言われました。それに対して弟子たちは悲しくなり、「まさか私ではないでしょう。」と次々に言い始めました。弟子たちにとっては裏切られるイエス様よりも、自分がイエス様を裏切る者ではないことのほうが大事だったのです。２０節で、イエス様は「十二人の一人で、わたしと一緒に手を鉢に浸している者です。」と名指しこそしませんでしたが、はっきりと誰かわかるかたちで、裏切る者はだれかを明らかにされました。さらに２１節では「しかし、人の子を裏切るその人はわざわいです。そういう人は、生まれて来なければよかったのです。」と、厳しいさばきのことばを告げられました。イエス様が、ここで裏切る者を明らかにしたのは、決して見せしめのためではなかったでしょう。むしろ厳しいさばきを告げることで、ユダに悔い改めを最後まで迫ったのだと思われます。また、ユダの裏切りも含めてイエス様が十字架にかかられたことで、全人類の救いが成就しました。ですから、ユダのしたことは結果的に益となって良かったということにはなりません。一人一人は、罪を犯した責任を主の御前で問われることとなり、その責任を負わなければなりません。ですから、私たちも罪から守られるよう祈らなければなりませんし、罪を示されたならば悔い改めて赦していただきましょう。悔い改めず残されている罪はありませんか。受難週の時に、主の十字架を仰いで、主の赦しを願いましょう。

３月３１日（火）マルコの福音書１４章２２～２５節

「取りなさい。これはわたしのからだです。」（２２節）「これは、多くの人のために流される、わたしの契約の血です。」（２４節）

「取りなさい。これはわたしのからだです。」（２２節）「これは、多くの人のために流される、わたしの契約の血です。」（２４節）と言われることで、イエス様は一般的にユダヤで行われていた過ぎ越しの食事を代々弟子たちが継承することとなった聖餐を制定されました。イエスは、パンをご自身のからだだと言われました。すなわち、食事においてパンが裂かれるように、十字架上でキリストのからだが裂かれることを意味していたということです。２４節では「これは、多くの人のために流される、わたしの契約の血です。」と言われました。神がイスラエル人と契約を結んだ時に、モーセは雄牛の血を民に注ぎかけました。（出エジプト記２４章８節）これが、イスラエルと神との血をもっての契約となりました、ところが、イスラエルは、この契約

を破り、神に背き、罪に罪を重ねました。しかし、主は決して彼らを見捨てず、預言者エレミヤを通して新しい契約を結ぶ時が来ることを約束されました。（エレミヤ書３１章３１節）それがイエス様の血によって実現するということです。まさに、イエスの血によって完全な罪の贖いによる、罪の赦しが実現し、新しい神の民が聖別されていくということです。

そして、私たちも神の民としてともに主の聖餐にあずかる恵みをいただいています。そして私もここを読みながら思わされたことは、この時には誰が一番偉いのかと議論していた弟子たちとイエスを裏切ったイスカリオテのユダもともにパンを食し、同じ杯から飲んでいました。私たちも何の悔い改めもなく、主の聖餐にあずかっていることはないでしょうか。主の十字架の血による罪の赦しを信じて、真実な悔い改めをもって毎月の聖餐にあずからせていただきましょう。

４月１日（水）マルコの福音書１４章３２～４２節

「わたしは悲しみのあまり死ぬほどです。ここにいて、目を覚ましていなさい。」（３４節）

イエス様と弟子たちはゲッセマネという場所に来ました。エルサレムの東、ケデロンの谷を越えたオリーブ山のふもとにゲッセマネという名の庭園があります。エルサレムからそれほど遠くないにもかかわらず、喧騒を避けることのできるこの場所は、格好の祈りの場でありました。イエス様もしばしばこの場所で祈られ、そして十字架を前にしたこの時にも、このゲッセマネで祈ろうとされたのです。

イエス様はペテロ、ヤコブ、ヨハネの三人を連れて行かれ、「深く悩み、もだえ始め」ました。「わたしは悲しみのあまり死ぬほどです。ここにいて、目を覚ましていなさい。」と弟子たちに言われてから、少し進んで、できることなら、この時が自分から過ぎ去るように祈られ、「アバ、父よ、あなたは何でもおできになります。どうか、この杯をわたしから取り去ってください。しかし、わたしの望むことではなく、あなたがお望みになることが行われますように」と祈られました。（３５，３６節）杯は苦しみの象徴です。イエスは間近に迫った十字架の苦難をできれば避けたいと願われましたが、神のお望みになることが行われますようにと祈ります。イエスは戻ると弟子たちは眠っていました。イエスは戻って、また祈られたが、弟子たちは眠っていました。まさに孤独な中で、十字架の苦難を前に汗が血のしずくのように落ちるほど苦しみながら祈られたのです。（ルカの福音書２２章４４節）

イエスがもだえ苦しんだことについて多くの人が様々な注釈を加えます。イエス様は、すでに十字架の死を覚悟していたのではなかったのか、どうしてここで「どうか、この杯をわたしから取り去ってください」というような祈りをされたのだろうかと言う人たちもあります。し

かし、ここでイエス様に死ぬほどの悲しみを覚えさせ、苦しませたのは、罪を知らない方が、罪人として神の聖なる怒りの下でさばきを受けなければならないということです。罪ある者としてさばかれるということは、父なる神と子なる神との交わりが完全に断たれ、父なる神に見捨てられることを意味していました。イエス様にとって、これほど恐ろしく、悲しいことはなかったのです。それでも、イエス様は父のみこころに従う道を選ばれ、苦しみと辱めと、十字架の上で父なる神のさばきを受け、捨てられる経験をされる道を進んでいかれました。

私たちは、イエスキリストを自分の罪からの救い主として信じるなら、もはや聖なる神様にさばかれ、捨てられる経験をすることはありません。それは、イエス様が十字架の上でそのことを経験されたからです。この受難週に今一度「神は、罪を知らない方を私たちのために罪とされました。それは、私たちがこの方にあって神の義となるためです。」（コリント人への手紙第二５章２１節）のみことばをともに味わいましょう。

４月２日（木）マルコの福音書１５章１～１５節

「ピラトはイエスに尋ねた。「あなたはユダヤ人の王なのか。」イエスは答えられた。「あなたがそう言っています。」」（２節）

最高法院全体の協議の結果、ユダヤの指導者たちはローマの総督であったピラトにイエスを引き渡しました。（１節）ユダヤの宗教指導者たちはイエスを死刑にしたかったのですが、（14章 55 節、64 節）彼らにはイエスを死刑にする権威はありませんでした。それで、ピラトに引き渡すことでローマの権威をもってイエスを死刑に定めようとしたのです。「あなたはユダヤ人の王なのか。」と尋ねるピラトにイエス様は、「あなたがそう言っています。」と答えます。第三版まではイエス様の答えを「そのとおりです」と訳していましたが、新改訳２０１７では、「あなたがそう言っています」と訳し変えています。これは、あなたがそのとおりのことを言ったとの意味で、イエス様ご自身はユダヤ人の王であることを決して否定しませんでした。３節で「そこで祭司長たちは、多くのことでイエスを訴えた」とありますが、ユダヤ人の王だと自称したとか、宗教的な問題ではイエスを死刑にすることができないと祭司長自身が気がついたのでしょう。ピラトはイエスに向かって積極的に自分を弁護するようにイエス様に促しますが、イエス様は何も答えられませんでした。父なる神にすべてをゆだね、十字架への道を歩むことを決めていたイエス様からすれば祭司長に対する反論は何の意味も持たなかったということです。

ピラトは、ここで祭りの際の恩赦に気がつきます。そこで「おまえたちはユダヤ人の王を釈放してほしいのか」（９節）と言いますが、祭司長たちはバラバを釈放してもらうように群衆を

扇動し、彼らはイエスを十字架につけるように要求しました。それでピラトは、バラバを釈放し、イエスをむちで打ってから、十字架につけるために引き渡しました。

祭司長たちをはじめとするユダヤ人の宗教指導者たちの行動の動機はねたみでした。（１０節）そしてピラトがイエスを十字架につけるために引き渡した動機は、「群衆を満足させようと思い」（１５節）ということでした。その一方でイエス様の行動の動機は、十字架の死にまで父なる神のみこころに従うということでした。私たちも日々動機をもって行動していますが、私たちの行動の動機は何でしょうか。願わくば、自分を喜ばせ、自分を満足させるということではなく、神を喜ばせ、神に従うことを動機として行動したいと思わされます。

４月３日（金）マルコの福音書１５章２１～４１節

「そして三時に、イエスは大声で叫ばれた。「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ。」訳すと「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。」（３４節）

今では「悲しみの道」（ビア・ドロローサ）と呼ばれるゆるい坂をイエス様は黙々と登って行かれました。しかし前の晩に逮捕され、休む暇もなく次々と裁判を受け、むちで打たれていたイエス様は極度に衰弱され、前に進んでいくだけの体力が残されていなかったのかもしれません。それで、兵士たちは通りかかったクレネ人シモンという人にイエス様の十字架を無理やり背負わせました。そのままイエスをゴルゴタという所（どくろの場所）に連れて行き、（２２節）そこでイエス様を十字架につけました。十字架刑がどんなに苦しいものかということを聖書は詳しく説明しませんし、マルコをはじめどの福音書もあっけいないほど簡潔に記されています。それは、十字架と聞くだけで当時の人々はその恐ろしさを理解できたのでしょうし、人間の情に訴えないということが福音書記者の方針だったのかもしれません。

イエス様は、三時に「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ」と叫ばれました。これは詩篇２２篇１節のことばです。このことばは文字どおり、神から捨てられた者の叫びです。まさに天の父との豊かな交わりの中にあったイエスが、神に捨てられる経験をしました。それは、イエスが人に代わって、罪の咎を背負って神のさばきをその身に受けられたからです。「神は、罪を知らない方を私たちのために罪とされました。それは、私たちがこの方にあって神の義となるためです。」（コリント人への手紙第二５章２１節）「キリストは自ら十字架の上で、私たちの罪をその身に負われた。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるため。その打ち傷のゆえに、あなたがたは癒やされた。」（ペテロの手紙第一２章２４節）とありますように、私たち罪人に代わって、イエス様自ら罪に対する怒りから来る神のさばきを十字架の上でその身に受けられたのです。それゆえに、そこには罪の赦しがあり、私たちは義とされ、義のために生きるように

私たちは導かれているのです。

イエス様は大声をあげて息を引き取られました。（３７節）ヨハネの福音書１９章３０節「そして、頭を垂れて霊をお渡しになった。」とありますように、イエス様の死は自らの意思に基づく自発的なものであったことを示唆していると言えます。イエス様は、まさに死に至るまで自らの意思で父なる神のみこころに従い通されたのです。

４月４日（土）マルコの福音書１５章４２～４７節

「アリマタヤ出身のヨセフは、勇気を出してピラトのところに行き、イエスのからだの下げ渡しを願い出た。ヨセフは有力な議員で、自らも神の国を待ち望んでいた。」（４３節）

木にかけられた死体は、その日のうちに埋葬しなければなりませんでした。（申命記２１章２２，２３節参照）しかも、この時は日没とともに安息日が始まろうとしていましたので、ある意味ユダヤ人にとっては一刻の猶予もならない状況でした。アリマタヤ出身のヨセフは、勇気を出してピラトのところに行き、イエス様のからだの下げ渡しを願い出ました。おそらく彼は神の国を待ち望んでいた人でしたが、自らの信仰を明らかにしていなかったのかもしれません。しかし、イエス様の十字架での姿を通して彼自身が変えられたのでしょう。イエス様の十字架には、人を変える力があることを思わされます。

そしてイエス様の遺体は岩を掘って造った墓に納められました。（４６節）岩を掘って造った墓は非常に高価であったと言われています。ところが犯罪者を納めた墓は、他の人の遺体を納めるために用いることはできませんでした。つまり、この墓にはイエス様の遺体しか納められることがないということであり、アリマタヤ出身の議員であったヨセフは、ある意味高価な墓をイエス様のためにお献げしたとも言えます。昨日見ましたように、イエス様は私たちのためにこの上ない苦しみと恥辱を経験されることで、私たちに代わって十字架の上で私たちの罪のさばきをその身に受けてくださいました。このイエスさまのことを思えば、私たちが犠牲を払うことに対して何か惜しむ理由があるでしょうか。むしろ、イエス様のために喜んで犠牲を払える者でありたいと思わされます。